

胆振東部 複合災害対策に焦点

北大ロバスト農林水産工学 国際連携研究教育拠点主催

BOSA Iシンポを開催

北海道大学ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点主催による「第2回防災技術イノベーション研究会 Robust BOSA Iシンポジウム」が1日、北大フロンティア応用科学研究棟で開かれた。パネルディスカッションでは北大工学院の教授らが北海道胆振東部地震を踏まえた減災技術、上水・公衆衛生の確保など複合災害対策について

話題提供。参加したパネリストらで議論を交わした。北大は前年度より、ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点構想を始動。北海道を中心とした農林水産業の高収益化、ロバスト化を目指したプロジェクトを進めている。教育拠点の構成メンバーである農林水産業従事者・行政・学識者・民間のコンソーシアムの発展を図り、喫緊の問題解決や中長期を見据えた技術革新につなげていくことが目的だ。

シンポジウムは、北海道胆振東部地震の複合災害対策に焦点を当て、産学官の調査で得た情報と知見を共有し、今後の課題や対応について協議する場として設けられた。



85人が参加し、講義やディスカッションを傾聴した

北大工学院院長の瀬戸口剛教授は

「人的被害だけではなく、産業のフィールドが被害を受けていることにも着目しなければならない」とし、取組の必要性を強調した。

特別講演では、宮坂尚市朗厚真町長が「平成30年北海道胆振東部地震からの教訓」と題して講話。厚真町の被害概要などを報告したあと、震災の教訓から「災害に対する日ごろの備えとして、受援体制や避難所運営の知識を蓄えておくことが重要」と説明した。また、地域の復旧・復興にメンタルヘルスケアやレジリエンス研修の重要性も指摘した。

パネルディスカッションでは、液化化被害、厚真町の人的被害と震災時の減災技術、震災時の上水・公衆衛生の確保を可能にする技術、将来の持続可能なエネルギーシステムと防災の4点について学識者が話題を提供。パネリストとして参加した宮坂町長、(株)大林組

設計本部の小林利道プロジェクト設計部長らで、大型化する近年の災害への対応の在り方について意見を交わした。